No.6　2020・5・10

「彼女は身ごもって男の子を産み、その子がかわいいのを見て、三か月間その子を隠しておいた。」

出エジプト記　2章2節

今日は「母の日」を記念しての礼拝です。モーセのお母さん　ヨケベデに触れたいと思います。モーセの父の名はアムラム、母の名はヨケベデです。彼らが家庭を築いたときは、イスラエルの民にとって困難な生活を強いられた時代でした。はじめは労働力として重宝されましたが、彼らの数が増える中でエジプトの王は彼らに脅威を感じ、生まれてくる男の子を皆、殺すように命じたのです。モーセが生まれたのはそんな時代でした。モーセの両親は、信仰によって、王の命令を恐れず、魂も体も共に滅ぼすことが出来る方を畏れ敬ったのです。この両親の信仰がなかったら、モーセの誕生も、イスラエルの救いもなかったのです。

両親は子どもの生まれる時の良し悪しを勝手に決めませんでした。彼らには、すでに二人の子どもがいましたから、あえて危険を冒さなくてもいい。そう考えたなら、モーセの誕生はなかったのです。

両親は子どもを「かわいい」と思えたのです。これは、子育ての基本です。子どもを無条件に「かわいい」と受け入れる愛が与えられていたのです。それは、人間的な情的な思い以上に、この子の特別な使命を見ていたのでしょう。

そして、両親は、神に委ねるとともに、知恵を絞って行動しています。パピルスの籠をアスファルトで防水し、姉ミリアムに籠を見守らせています。そこへファラオの王女が訪れ、王女は葦の茂みの間に籠を見つけたのです。私たちも絶対絶命という状況においても、神は神を愛する者たちと共に働いて、万事を益としてくださることを信じ、日々を歩んでまいりましょう。モーセを救い出した神は、私たちが信じる同じ神なのです。

■創立者　岸田愛治牧師
召天記念日　1976年5月13日

毎年、創立者　岸田愛治牧師の召天記念日に近い日付で「創立者召天記念宣教祈祷会」を行っています。今年はこの時期に記念の集会を行うことはできません。しかし、創立者と教会の開拓期を覚えて、宣教への祈りは共にさせていただきたいと願います。

《記念誌「創立者のあしあと」より抜粋》

岸田愛治牧師は1902年（明治35年）築地の明石町で誕生。10代の後半には母親が病死、数年後には父親も亡くなるなど、若くして親兄弟を失いました。28歳の時に、食事に誘われて出掛けてみると、そこではキリスト教の集会が開かれていました。一日70本も吸っていたタバコをやめて生活を変えたいとの願いから信仰を持ったとのことで、その生活ぶりの変化には周囲の人が驚いたそうです。教会生活は、渋谷の教会に通い、伝道活動に励みました。

1934年（昭和9年）、共に伝道に励んでいた砂山（いさやま）初子と結婚。独立し、同年9月に蒲田の御園に6畳2間の借家を借り受け、「基督宣教会」を設立（その後、シオン教会に名称を変更）。開拓伝道が始まりました。

一切の支援を受けずに始まった教会活動は、救われる人が起こされ、活発に活動しました。しかし、日本は太平洋戦争に突入。教会も厳しい時代を迎え、空襲で会堂が焼失するという経験もしました。

御嶽山へ移動ののち、戦後、再び蒲田へ戻り、資金も資材もない、まさに「信仰のみ」というところから、1949年（昭和24年）に現在の場所に会堂を復興。戦後の荒廃に飢え渇いた人の心は、砂漠が水を求めるように福音を求め、駅前の路傍伝道が大いに功を奏し、救われる人が続々と起こされました。

伝道のためには何でもしようという気持ちに溢れた愛治牧師は、ある時にはまだ家庭に普及していなかったテレビを購入し、当時大人気の力道山のプロレスを教会で中継。講壇横に据え付けたテレビでプロレスを放映し、試合が終わると間髪を入れずに立ち上がり、「皆さん。人生はプロレスと同じです。負けるか、勝つかの真剣勝負。あなたは悪魔の誘惑に負けてはいませんか。勝利の秘訣はキリストにあります。キリストはすでに死と悪魔に打ち勝った御方です。」と伝道説教を行いました。終わった時には何人かの求道者が生まれていました。

病院伝道や地方伝道も展開。その結実として、茅ヶ崎、沼津、石岡、横浜にシオン教会が誕生しました。

歴史を振り返れば、もちろん良い事ばかりではありません。しかし、ただキリストのために、と救いの恵みに感謝をして主に仕え、福音を証ししたそのスピリットに、私たちも倣わせていただきましょう。